安久窯と半田窯について

伊賀　一清

一、安久焼の時代と窯

慶長年間備前の陶工が田辺（現在の舞鶴）の安久に来て焼物の技法を伝えた。時は豊臣の勢力が徳川に移りかわろうとしている前であり、ついで田辺藩では細川家から政権を受けついだ京極高知が信濃から田辺へ移封して来た時である。

この頃京都に於ては、茶腕屋久兵衛が東山に窯を築いて、清水焼、粟田焼、高台寺焼等いわゆる京焼の基礎を作った。

其の後江戸初期になると、仁清が清水焼の逸材としてあらわれ、楽家に於いては、二代常慶がすばらしい技法を見せるようになった。

秀吉の朝鮮征伐以後は大陸の文明が導入されて、特に陶器界は全国的な躍進をみた。わが田辺に於ても陶器作りに一縷の光明が見え初め、前記備前の陶工が安久へ来て、当時の氏神であった高倉神社へ（余部）高麗犬を奉納している。（その高麗犬には慶長十八年の紀年銘あり）この狛犬は当時の遺品として田辺藩の陶器の歴史を実証している貴重な資料である。其の後六十七年あとの貞享二年極月、丹後田辺安久村木村五良左ェ門の作と伝承する狛犬を舞鶴市港区の新井徳太郎氏が所持して居り、現在も健全な姿で当時の面影を忍ばせている。（写真①参照）

これは田辺城主牧野富成公の時代で、この二品の他、街にはこれらと同類の壺が幾つか残されている。これは古備前焼と非常によく似たもので、ひょっとすると混同されるようなものである。（高温濾土の安久焼壺、南浜西本満氏所有、写真②参照）

安久焼はかなり長い間焼かれたと思われ、街にもかなり作品が残っている。田辺の窯は前記の狛犬のようなものは至って少く、多くは日常使用の雑器が多く作られて居り、現存するものは梅干壺、こね鉢、手洗鉢などである。

これらの作品を吟味してみると、粘土を濾したのと濾さない土、窯の温度が高い物と低い物とがある。大体濾土は高温で、濾さないのは低い温度のようである。遺作品を見ると低い物は千度位から高い物は千三百度位までと思われる。当時は温度計はなく、火の強さ（火色）と勘をたよりに焼く時間を決めたもので、当時としては大へんな技術がいったと思う。（低温度荒土の作品、高雄仁氏所有、写真③参照）

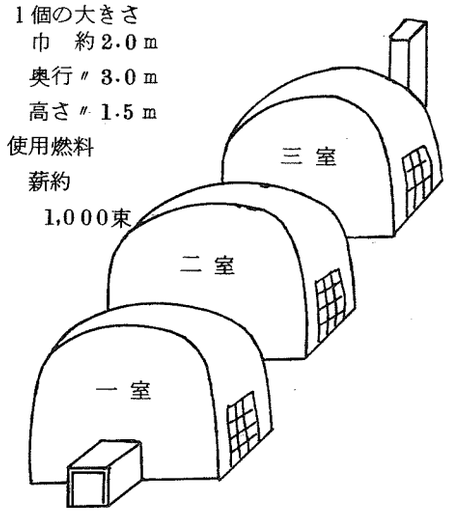
材料の陶土は近在の粘土を使ったもので、伊佐津川の粘土、由良川筋、上福井、与保呂川祖母谷川等の山や川にも丹波焼によくにた粘土があり、これらを素材として作ったものと思う。

左記の所在地から採った粘土を一、二八〇度で二十二時間実地に焼成してみて伝世品とくらべてみた。

舞鶴市池内下	山土	一種
伊佐津川	川土	二種
大雲橋下	川土	一種
上福井田井賀	山土	一種
溝尻祖母谷川	川土	一種
青葉中学校横	川土	一種

安久焼の窯跡は、相生橋の北側山すそにあったと言伝えられているが、残念ながらまだ発見出来ていないが、高倉神社に前記の安久焼初期の作品が奉納されている所から、氏子である下安久に窯があったのではなかろうか。尚、窯は古備前焼等から考えて登り窯ではなかったかと推定される。

この窯は通常一室には釉薬を付けたものとか上質なものが入れられ、陶器と磁器と一処に焼く場合は一室に磁器を入れたと考えられる。二室には普通陶器を入れ、三室には素焼などを入れる。火入れは一室から焼き、焼き上るとき、三室もまた同様にしてゆく。通常昇窯（備前）に要した焼成日数は一日～三日位で、特別なものは七日位焼いたと思われる。



と、二室への通路をとざして横の穴から火を

磁器を焼いたとすれば一室で焼くが、私の調らべた範囲ではこの辺には磁器に適した粘土はない。この辺の土はほとんど鉄分とニッケル分が多く含まれていて、焼くと土が酸化して赤くなり釉薬が青味をおびる。上福井の粘土を選別して焼くと白く上るが、これにても磁器にはならないと思うが今後の研究に依りたい。（市民会館添付の素焼見本参照の事）

二、半田窯と発掘品

半田焼の研究は既に先輩である、村上佑二先生が昭和十五年に研究発表されている。その中で先生も半田窯に於ては記録が何一つ残されていないので今後の研究による、と申されている様に多くの疑問が残されている。

舞鶴の粘土からみた半田焼を推定してみると、鉄分の多い白い粘土が多く、これを焼くと赤くなり上りは丹波とか備前焼によく似ている。粘土と云うものはその土地特有のものであり、その粘土を使って焼き上げると一見して何焼であるかがわかる。今では運送の便がよくなったので、どこの土でもたやすく手に入れる事が出来るが、江戸中期に於て他国へ粘土を運ぶ事はそれは大変な事だったろうと思われる。百粁程離れた所の出石に磁器の土があるが、これにしても大きな峠を隔てた所であり、こゝから磁土を運んだとも考えられない。又運ぶ理由も考えられないし、半田窯の跡から発掘された物を見ると出石の磁土ではない。粘土も釉薬も古伊万里系統のものである。（窯跡の発掘品、写真④参照）

半田窯の発掘品と称するものは沢山あるが、たしかな伝世品ではない。もし信用できる作品があるならば、ある程度判定の資料になるが、今では瀬尾氏の皿も円隆寺の宝物である徳利も残って居ない。

発掘された資料が種々雑多であり、一つの窯元では陶土、釉薬、技法の関係上あり得ないと推定するのが妥当かと思われ、半田窯以外の物もまざって出ているのではないかとも思われるので定説をたてるわけには行かない。

その中で低温度の素焼でそぼくな日用雑器の破へん（こね鉢、壺）などがあるが、これが半田窯で焼かれた物ではないかと思われる。

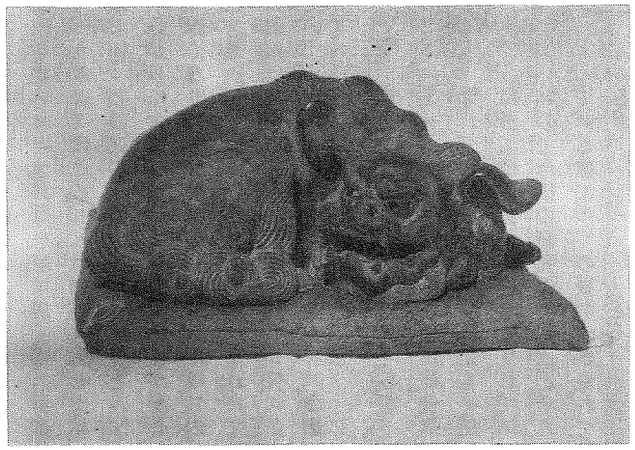
これはこの辺の陶土で造った物であり、安久焼にも見られる作品である。街に残されている壺やこね鉢のうち、温度の低いのは安久か半田か見極めるのがむずかしいと見るのが妥当と思う。半田窯が昇り窯であったとすれば前記の様なもので、窯の大きさに比して燃料が安くつくが、これにしても温度を上げるのが大へんな事で沢山の薪がいるので温度の低いものであったと思う。この様な遺作品が窯跡や街には見られるが、これは三室で焼いたものかも知れない。

半田に窯があったのが、文化文政の頃とすれば城主以成公の頃であり、新宮涼庭先生の時代である。この頃とすれば大して年代が古いとはいえないのに半田窯に付いての記録資料が何も無いのも不思議である。

わからない事が沢山あるので一つ一つの積重ねによって追求して行きたいと思う。

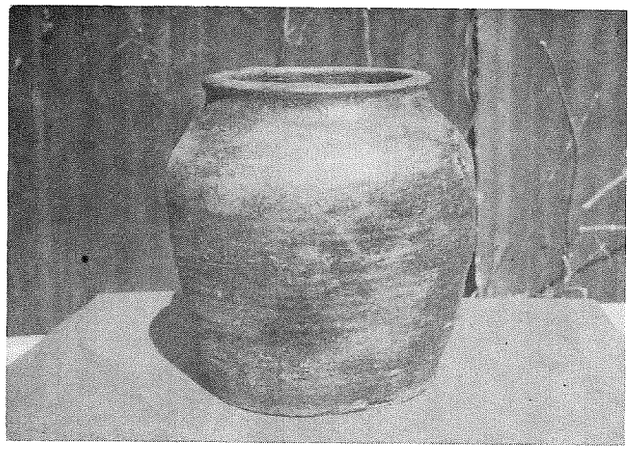
此の所見は池田儀一郎先生、井上金次郎先生の指導御協力を得、発表させていたゞいた。

今後も郷土の陶土で焼物を造り、陶器をとおして見た郷土を研究したいと思う。

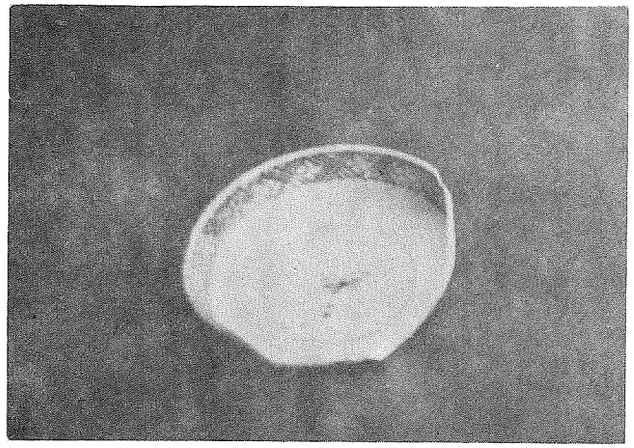


①安久焼　狛犬

②安久焼　壺



③安久焼　壺



④半田窯跡発掘品